



狐塚5号墳 形象埴輪群 (近江町教育委員会)

## 開館5周年記念企画展

## ◆近江の古代を掘る—土に刻まれた歴史—◆

10月14日(土)～12月3日(日)

平成七年は、大津市歴史博物館が開館してからちょうど五周年にあたります。本館では、これを記念して、一〇月一四日から企画展「近江の古代を掘る」を開催します。

近年の発掘調査による考古学研究の進展は目を見張るものがあります。いまま、毎日のように、各地で新しい発見があり、つい最近までは、縄文時代の大集落・青森県三内丸山遺跡発見の報道が新聞紙上やテレビなどを賑わしていました。近江(滋賀県)においても、ここ二〇年ほどの間に、大津宮跡(大津市)をはじめ、服部遺跡(守山市)・穴太廃寺(大津市)・唐橋遺跡(同左)・雪野山古墳(八日市市)・宮町遺跡(信楽町)・伊勢遺跡(守山市)など、新しい発見が数多く報告され、近江の古代の歴史が次々に塗り変えられていっています。また、戦前から戦後の昭和三〇年代にかけても、日本の考古学界を代表するような遺跡、例えば石山貝塚や鴨稲荷山古墳、安土瓢箪山古墳、雪野寺跡、近江国庁跡などの発掘調査が行われています。

本展では、昭和五〇年代以降に発見された新しい資料を中心に、それ以前の著名な発掘調査例も加え、縄文時代から奈良・平安時代にかけての近江の古代の歴史の流れをわかりやすく紹介していきたいと思っています。展示品は、重要文化財一二点を含む総点数一千点余りになり、なかに土偶・木偶・琴・銅鏡・埴輪・木簡など特徴ある資料や復元模型などでもできるかぎり加え、どなたにでも楽しんでいただける展示内容になっています。ご期待下さい。

## 企画展の内容（主な展示作品）

「近江の古代を掘る」展では、次のような出土品や復元模型をはじめ、多くの写真資料なども展示しております。

☆本展は、第一部から第四部までの四つのコーナーから構成しています。

- 一、縄文時代―縄文人のムラ―
- 二、弥生時代―コメ作りの始まり―
- 三、古墳時代―古墳の出現―
- 四、歴史時代―古代の役所と寺院―



雪野寺跡造童子像（京都大学文学部博物館蔵）

☆主な展示作品は次のとおりです。

- 松原内湖遺跡へラ状木製品（滋賀県教育委員会）
- 正業寺遺跡縄文土器・土面・耳栓  
（能登川町教育委員会）
- 大中ノ湖南遺跡木製農耕具・木偶  
（滋賀県立安土城考古博物館）
- 重要文化財大岩山遺跡銅鐸  
（滋賀県・辰馬考古資料館蔵）
- 伊勢遺跡出土破採鏡・玉類（守山市教育委員会）
- 雪野山古墳銅鏡・漆塗り靱・堅櫛・合子  
（八日市市教育委員会）
- 重要文化財新開古墳銅鏡・鞍・轡・眉庇付冑  
（滋賀県）



銅印 銘「乙貞」（守山市教育委員会）

○安土瓢箪山古墳銅鏡・石製模造品・筒形銅器  
（京都大学文学部博物館蔵）

○狐塚五号墳形象埴輪類  
（近江町教育委員会）

○宮町遺跡木簡  
（信楽町教育委員会）

○雪野寺跡塑像片・風鐸（京都大学文学部博物館蔵）

なお、展覧会期間中には、開館五周年記念講演会（二月二十九日）やギャラリートークなどを開催いたしますので、申し込みなどのお問い合わせは天津市歴史博物館へ（天津市御陵町二二二 ☎〇七五五―二二二一〇〇）。

## 学芸員のノートから①

今までお届けしてきた「博物館だより」を、開館五周年を機に「大津歴博だより」と改称し、内容の充実を計ることになった。この「学芸員のノートから」は、それにもなつて新たにスタートするものである。

当館では、展覧会の開催や資料調達、土曜講座や現地見学会（ふるさと大津歴史教室）などの普及活動や歴史情報の提供など、多岐に渡る活動を行っている。

そのなかで、展覧会準備にまつわる話や資料調査による新たな発見、普及活動のなかで得た興味深い情報、講座参加者や展覧会の入場者と接して感じたことなど、さまざまな収穫がある。

このコーナーでは、それらの収穫物を前にして学芸員が発見したこと、感じたことなどを随時紹介し、博物館の日常活動の一端を知っていただこうと思う。第一回目は、資料調査活動の成果について紹介する。

### 大津上京町の年寄引継文書について

平成八年春（四月～五月）、当館では企画展「大津祭」の開催を予定している。それにもない現在、展覧会準備に係る事前調査の一環として、曳山町所蔵の古文書調査を実施し、随時内容の検討及び目録化を進めている。大津町の構造や町人の動き、大津代官の町方支配などについては、すでに昭和六十三年から刊行が始まった『新修大津市史』の当該巻のなかで触れられているが、今回改めて町有文書の調査を実施するなかで、いくつかの新しい発見があった。今回は、それらの点について少し、紹介してみよう。資料は上京町所蔵の

古文書である。

現在、各町所蔵の古文書類は、江戸時代以来年寄役（現在の自治会長にあたる役職）が管理してきた。それらの古文書或いは町として大事な什物類は、年寄役が改選されるたびに、これから紹介するような引継ぎ書類を作成し、受渡しの確認を行ったのである。

この引継ぎ書類は、上京町では「渡し物覚」と表題が記され、次に引き継ぐべき品々とその数量が列挙されている。見てみると、いろいろな物が引き継がれている。全体で五二項目にのぼっており、主な物を列挙すると、

伊勢講帳、入銭之通、電銭之通、愛宕山月掛講通、  
太神宮様御掛もの、町家置掛もの、借家送り覚帳、  
宗旨改メ帳、新古絵図、町内沽券帳、勘定帳、名  
跡死後讓帳、御触帳、要用帳、繰見送り（但し箱  
共）、諸帳面古反入長持、明神宮守証文、石川町為  
取替証文、扇屋関連印証文、同絵図、道中御奉行  
様御触写、町内定目帳、馬挑燈并に小田原挑燈、  
火事装束、陣笠、珠数、硯、帳筆筒、山蔵鍵、家  
請引取帳（箱とも）、町内印形

以上のような具合である。伊勢講、愛宕講などは、伊勢神宮や愛宕社への代参が町から出されており、その費用捻出のために講をくんでいたものである。掛け物とは掛け軸のこと。宗旨改メ帳や町内沽券帳、名跡死後讓帳などは町内構成員とその移動を把握するための重要書類、勘定帳、定目帳も町内の「自治」の維持にはなくてはならない書類であった。また、扇屋関連印証文は大津港の荷揚場の一つである扇屋関の修復維持のため関連各町と取り交わした証文なのだろう。

その他、大津祭の見送り幕（現在重要文化財指定）や山蔵の鍵の管理も大事なことであったが、その他に馬挑

燈、小田原挑燈、火事装束、陣笠、数珠、硯などまでが、こまかく書き上げられている。実に数多くの物件を町が管理し、その保存のために当時の年寄役がいかに重要な責務を負っていたのかが理解できるだろう。

「渡し物覚」は、以上の品々を列挙したあと、「右之通二御座候、御改御入手可被下候」と書いて、先役の年寄が跡役の年寄に提出したのである。引継ぎ物件を列挙した各項目書の上には、「合」の丸印が押してあったり、年寄役の印鑑が押してあったり、また各々チェックしたような墨跡が見られたり、引継ぎに際しては入念な確認作業が行われたことが伺える。

また右の書類に列挙された物件のなかでも移動に却って手間のかかるもの、たとえば曳山の見送り幕などは「誰々殿方へ預け置く」などの注記があり、保管場所は一定していたようだ。このように厳重な手続きを経て、町共有の古文書を始めとする什物類は引き継がれてきた。我々学芸員が調査によって発見する資料はこれら先人たちの努力によって残されてきたものに他ならないのである。

さて、この「渡し物覚」が興味深いのは、以上のような引継ぎ物件の内容や手続きのみではない。この文書の大きさは、縦が二四・六cmであるのに比較して、横五五・八・四cm、つまり五m以上の長細い、何枚にも紙を継いだ書類なのである。引継ぎ物件を列挙した本紙の後に、年寄役が交替するたびに、先役から跡役へと名前の署名のみの継ぎ紙が長細く貼り継がれていたのだから、さらに引き継いでいくといった形式になっただけでなく、新たな物件を列挙したり付箋によって処理をしたり、新たに物件を列挙したりしながら、さらに引き継いでいくといった形式になっている。したがって、引き継ぎの年月日、すなわち年寄



渡し物覚①

引継物件と員数の間に西村姓の印が押されている。



渡し物覚②

上部に④の印が押されている。員数の下はチェックの墨跡が



渡し物覚③

年寄の先役から跡役への引継の署名

役の改選年月日も把握できる。  
次に、この書類が最初に作成された天保六年（一八三五）七月以降の改選年月日を列挙してみよう。

- 天保六年（一八三五）七月 先役藤五郎→跡役寿平
- 天保九年（一八三八）七月三十日 先役寿平→跡役利右衛門
- 天保十二年（一八四一）七月二十五日 先役利右衛門→跡役藤兵衛
- 天保十五年（一八四四）七月二十五日 先役藤兵衛→跡役寿平
- 嘉永元年（一八四八）八月二十五日 先役寿平→跡役弥兵衛
- 嘉永三年（一八五〇）七月

先役弥兵衛→跡役嘉兵衛  
嘉永六年（一八五三）七月二十五日  
先役嘉兵衛→跡役喜次郎  
安政六年（一八五九）七月二十五日  
先役喜二郎→跡役船橋長兵衛

これによって判明することは、年寄の任期は、従来指摘されているように三年間が基本で、何らかの事情により二年、四年、ときには六年（二期就任か）といった例外が発生する、というのが実情であったことが伺える。また改選年月日は、七月二十五日（旧暦）が基本になっていたようだ。七月二十五日といえば、旧暦でお盆の時期が過ぎ、二十四日の地藏盆も終わった頃にあつている。農村部の生活サイクルは、どうしても農作業に影響されるが、大津町のような都市部の生活サイクルは盆行事がひとつの変わり目にあつていたのであろうか。

以上、上京町に伝わった年寄改選時の引継ぎ書を通して、江戸時代の町内生活の一端を紹介してきた。曳山町における一年間の最大の行事は、十月の大津祭（四宮祭礼、旧暦九月）である。ただ、当時の曳山町は大津祭の維持、運営とともに、伊勢講、愛宕講などの定例行事や隣町との和合のための集會、町内の人々の転出入管理など、実に慌ただしい生活を送らなければならなかった。そのそれぞれに規定書や証文などの書類が必要となる。そして、それら作成された書類の山はまた、町全体（直接的には代表者の年寄）が管理していくべきものであったのである。したがって、今回紹介した管理書類及び什物の引継ぎは、町内にとっても重要な年中行事の一つであつたといえるだろう。

# 収蔵品紹介 21

近江八景図 鶴沢探龍筆 紙本着色 六曲一双

縦一七一、〇 横三七二、〇 本館蔵

鶴沢家という京都の画系をご存じでしょうか。上佐家とともに禁裏御用の頭取を勤めていた絵師の家です。初代の探山（当初は狩野探川）はもともと、幕府の奥絵師、狩野探幽の高弟として江戸で活動していました。が、東山天皇の勅宣で、禁裏御用絵師になるべく探幽門下の秀逸として抜擢され、元禄期に上洛して京に居を定めました。そして、その誉れ高い経緯をもって、代々京都画壇において重きをなしていました。ちなみに家名を鶴沢に改めたのは二代探鯨からです。

ところで、御所での絵師の活躍を伺う資料のひとつに「天明六年改御屏風目録」（一七八六）があります。これを見ると、探山・探鯨・三代探素はもとより、鶴沢幽皓・幽泉・吉田元陳・石田幽汀・大森捜雲・捜月・掘索道・狩野宗三など、探鯨、探索の門人の名も繰り返し現れ、鶴沢派全体ではかなりの数の屏風を描いています。一八世紀の後半、鶴沢派は禁裏御用において相当の勢力を持ち、幅をきかせていたようです。

さて、この「近江八景図」を描いていた探龍ですが、天明から半世紀ほど後の天保から安政にかけて活躍した人物です。「平安人物志」には天保九年版（一八三八）に初登場し、慶応三年版（一八六七）にまでその名が見えます。ただし、「京都名家墳墓録」によると、鶴沢家菩提寺の善導寺（京都市上京区）の過去帳では探龍の没年は安政二年（一八五五）とあり、食い違いを見させています。さらに、鶴沢家は、その格の高さのわり

に殆どの宗家の享年がわかっていない不思議な家で、探龍もその例に洩れず、弘化四年（一八四七）出版の「皇都書画人名録」では「御画工」と記されVIP絵師なのに、やはり、先代同様、享年については記録がなく、生年不明なのです。加えて探龍は、遺作の紹介や確認も少ないようです。

そのような状況にあつて、本図は大画面作品として興味深いものです。大きく取った余白に金砂子で、すやり霞を引き、個々のモチーフも大和絵風にあつさり描写して穏やかな画面に仕立てています。右隻の比良暮雪や堅田落雁、左隻の石山秋月はいうにおよばず、さらに右隻では三井寺の桜満開、左隻では粟津の湖畔に葦の青葉、石山の手前には刈り取りの済んだ田を描くなど随所に四季の景物が散りばめられています。

現代から見れば絵の表現や構成に物足りなさを感じるでしょうが、細部においては、丁寧な紅葉の点描や、いかにも鶴沢様の波の描写、そして屋根の並ぶ大津の町並みの新味のある感覚など見るべきものがあります。

また、八景のうち七景にも松があしらわれ、特に、比良の雪中に青々と描かれている点、常緑に象徴される千代の栄えが強調されており、いかにも表向き作品となっております。案外、禁裏の屏風もこのようなスタイルで描いていたのかも知れません。

（横谷 賢一郎）



右 隻



左 隻

れきはくインフォメーション

12月		11月			10月				
土 9	親子歴史講座 真野春日山古墳群をさぐる ○県下最大級の群集墳の現地見学会 午前10時～11時30分	土 2	土曜講座 近江の仏像Ⅱ ○仏教美術の宝庫・近江に伝わる仏像の優品をスライドで解説 午後1時30分～3時	土 25	ふるさと大津歴史教室 皇子山古墳と長等周辺 ○皇子山古墳 法明院 弘文天皇陵 新羅国神室 新羅三郎の墓 (午後半日コース)	土 7	土曜講座 大津祭とからくり ○湖国三大祭の一つ・大津祭の魅力を紹介 午後1時30分～3時		
土 11	親子歴史講座 古代の寺院「崇福寺」を歩く ○失われた古代の面影を探る 午前10時～11時30分	土 18	ふるさと大津歴史教室 諸浦の親郷堅田 ○満月寺浮御堂 伊豆神社 光徳寺 本福寺 祥瑞寺 居初氏庭園 (午後半日コース)	祝 3	ふるさと大津歴史教室 渡来人の史跡を訪ねて ○苗木神社 豊野寺跡 妹背の里 八幡社古墳群 木村古墳群 石塔寺 (バス一日コース)	日 29	開館5周年記念講演会 ○リレー講演「日本の中の近江」 田中隆彦文研所長 西川幸徳滋賀県立大教授 武田哲夫大前太子大教授 谷田久武庫川女子大教授	土 14	親子歴史講座 旧宿場町大津の探検 ○浜大津周辺の街道の現地見学会・実測・説明 午前10時～11時30分

〈開館5周年記念企画展〉  
近江の古代を掘る—土に刻まれた歴史— 10/14~12/3

「街道の民画—大津絵」閉幕

平成七年四月二十九日に開催しました「街道の民画—大津絵」は、五月二八日、好評のうちに閉幕しました。

大津絵は、江戸時代初期から末期まで、東海道の宿場町大津の追分・大谷付近で描かれていた庶民性あふれる絵画で、主に仏教の尊像を描いた仏画に始まり、滑稽で諧謔味を帯びた、あるいは美人・英雄を描いた世俗的な画題が登場するに及んで街道の土産物として人気を集めました。

本展では、そうした大津絵にスポットをあて、様々な画題とその変遷をたどるほか、歴史資料や浮世絵も展示して、その歴史と周辺に与えた影響も紹介しようとしたものです。町田市立博物館や日本民藝館、浜松市美術館をはじめ、十二の博物館・美術館、九人の個人所蔵者の方々のご協力をいただき、一八四点の大津絵と二八点の関連資料を展示しました。

二五日間の会期のうちに、滋賀県内および京阪神から大津絵に関心を持つ多数の方が来館され、総観覧者数は八、〇一六人に及びました。

なお、五月十三日には作家の中島道子氏を迎えて講演会「岩佐又兵衛の芸術と人生」を、さらに二十日には大津絵師四代目高橋松山氏を迎えて講演会「大津絵を描く」を開講しました。聴講者数はそれぞれ五二人、一二人でした。



○歴史カードを発行しています○

歴史博物館では、七月一日から、ご観覧に便利な特典のついた、定期観覧券「歴史カード」を発行しています。

料金は、一般 二千円、高校・大学生 千五百円、小学・中学生 千円です。

有効期間は、発行の日から一年を経過した月の月末まで。(たとえば、九月十日の発行の場合、翌年の九月末日まで有効となります)

特典は、次のとおりです。(ただし、有効期間中、記名ご本人のみの特典です。)

- ① 歴史博物館主催のすべての展覧会(常設展示を含む)を、いつでも、何回でも、観覧できます。
- ② 歴史博物館の発行する図録・歴史文庫を、割引価格(約一割引)で購入いただけます。
- ③ 展覧会や講演会、土曜講座などの催し物のご案内(年2回)や、博物館の話題を掲載した「大津歴史博だより」(年4回)を無料でお送りします。

「歴史カード」は、歴史博物館で随時発行しています。購入ご希望の方は、ご来館いただくか、現金書留(料金と送料の切手八十分が必要)でお申込みください。

大津歴史博だより 第23号

発行日 平成七年九月二〇日  
編集 大津市歴史博物館  
発行所 大津市御陵町二二二  
大津市歴史博物館  
電話(〇七七五)二二二二〇〇代